海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	小花 彩人　　印
所属機関	柏厚生総合病院
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会･会議名	The American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting 2019（米国大腸肛門外科学会 2019）
渡航期間	自 2019/5/31 至 2019/6/6
・研究内容 ・国際学会・会議内容	The Association between Primary Tumor Location and Risk Factors for Recurrence in Patients who underwent Curative Resection for Stage II Colon Cancer

研究成果　（　要約：800字　）

今回、ガン振興財団の助成より、Cleveland, Hungtington Convention Center での American Society of Colon & Rectal Surgeons 2019 において、我々の研究結果を発表して参りました。

かなり大きな会場で下部消化管での学会では世界最大規模のものであり、非常にたくさんの聴取が集まり、議論質問の時間も長かった。

発表した演題が「右と左の大腸の違い」に関するセッションであったため、進行癌に対する化学療法の効果の違い、分子標的薬を使用した場合における反応の違い、予後などの発表がメインであった。

その中で大腸ガン Stage II の場合、術後化学療法を行うかどうかに着いてはまだまだ議論の余地があり、学会によってガイドラインも適応が変わっている。右と左で遺伝子学的な違いがあるということはコンセンサスが得られているのみであり、我々の研究成果である「病理学的因子から見た右左結腸の再発の独立危険因子とその比較」は大きな議論となった。

病理学的な評価から何が再発に寄与するかをアプローチする視点は非常に興味深いとの意見が座長から出たが、患者数が 200 そこそこであり、もっと大きな研究をすることができればもっとより正確な再発に対する病理学的独立危険因子が同定できるのではないかとのことであった。

現在において前向き研究の結果から転移を伴う大腸ガンにおいては右側の方が左側より予後が悪いことと報告されているが、切除可能な大腸ガンではまだコンセンサスは得られてはいない。

私は今後この研究成果を論文として当学会が発行している Disease of colon and rectum に投稿する予定であるが、あくまでも患者数が多くはないので、「左右で再発における独立危険因子が違うものになる」という結論にした方が良いのでは、という意見を雑誌の Reviewer をしている米国人医師にアドバイスを頂いた。

今後も同様にデータを集めてより大きな患者数で病理学的再発独立危険因子を正確に捉えたいと思う。

非常に得るものが多く学ぶことが多い学会であった。この経験を通して得たものを用いてより一層ガン研究に打ち込んでいきたいと思う。